

# 探訪 北の風景 29

## 天空に続く道 根室管内・中標津町

青木和弘

局が設置されてから、町による開陽台の観光開発が始まり、64年に展望台や駐車場、給水設備が整備された。82年に出版された佐々木譲のツリーング小説「振り返れば地平線」で有名になり、やがてバイクで旅する若者たちに、地平線が見渡せる雄大な眺望と、銀河の架かる夜空の迫力、雨夜の闇が話題になり、長逗留する者が増え、やがて「聖地」と呼ばれるようになった。

94年に新しい展望台ができ、車で立ち寄る観光客が増えたものの、バブル景気が去り、バイクで訪れる若者は減った。国内の二輪車保有台数は85年に1818万台まで増えたが、2015年は1148万台と63%にまで減少している。一般社団法人自動車工業界。若者の二輪車離れが進み、いま、ライダーの主力は40代以上だという。

激しい雨がアスファルトの路面をたたき、濃緑に覆われた酪農地帯は、灰色に煙っている。雨脚が弱まり視界が少し開けると、黒くぬれた舗装道路は丘陵の起伏を貫いて真っ直ぐ伸び、その先は天空に吸い込まれていた。

根室管内中標津町開陽。「ライダーの聖地」として知られる開陽台のすぐそば、町道北19号は、牧草地と防風林がどこまでも続いていた。

開陽台は標高271メートルの小高い丘陵だ。町営の乳牛育成牧場が西側に広がり、1000頭もの牛が放牧されている。

1961年（昭和36年）にNHKテレビの中継

中標津町は人口2万3907人（2016年7月末現在）の酪農の町だ。耕地は、2万3400ヘクタールの牧草地と、1100ヘクタールの畑があり、酪農は、乳牛3万9410頭、飼育戸数300戸（2016年2月末現在）で、生産する生乳は飲用のほか、多くはナチュラルチーズの原料になる。畑作は馬鈴薯、甜菜、大根が作付けされている。

中標津の歴史は、発見された遺跡や縄文土器などから、約6000年前に遡るが、その後の、縄文時代、擦文時代、アイヌ時代なども詳しいこ

開陽台から見渡すと、格子状防風林もよく見える。開陽台展望台から



とは分かっていない。

中標津の開拓は、1911年（明治44年）、徳島県の乾定太郎を団長とする入植団が、現在の市街の東側、俵橋地区に入ったのが最初だ。その後、川北、武佐、開陽と西へ向かって開墾が進んだ。そして、1923年（大

正12年）、武佐地区と開陽地区に乳牛が導入され飼育が始まった。しかし、畑作から酪農へ転換を図るのはまだ先のことだ。

1931年、32年の大冷害を受け、道は冷害対策として「根釧原野農業開発5カ年計画」（昭和8年）を策定。ここで畜産への転換を図ることにした。計画は戦争で中断するが、戦後の、54年、国際復興開発銀行（世界銀行）からの融資によるパイロットファーム事業（正式名「根釧機械開墾地区建設事業」）によって新たな入植者を迎え、近代的な大規模酪農の道を歩むことになる。これによって、いまの景観が生まれたのだ。

もう一つ、この酪農地帯の特徴的な風景が「格子状防風林」だ。開拓期にアメリカ人顧問のホー





酪農地帯を貫き、真っ直ぐ天空へ続くような町道「北19号」は、「ミルクロード」とも呼ばれる。ミルクロードと呼ばれる道は、ほかにも国道272号、同243号がある。ただ、243号は中標津町内を通らない



開陽台展望台。名物は「しあわせのはちみつソフト」

\* 文化村は1966年、東京在住の釣りグループが来町の際、町長が「別荘を建てるなら土地を提供する」と言ったことから生まれた構想だったが、実現をみないまま幻に終わった。

レス・ケプロンの提唱で造られたもので、2001年（平成13年）、北海道遺産に登録されている。開陽台の展望台の傍らに「こころの碑」（昭和46年5月27日建立 開陽台文化村）という小さな石碑がある。開陽台を愛し、ここに文化村をつくろうとしながら、北海道に渡る1週間前に殉職した会社員の青年、中野英輔さんを悼み、有志らが建てたものだ。碑の正面に中野さんの言葉が刻まれている。

「さて小生はいよいよ北海道へ渡ることをかたく決意しました。現代の人間には真に自然が必要であります。その中で同じ世代に生きる人たちの連帯感を深めることができればと思っています。中野英輔」

開陽台にふさわしい碑だと思った。